美術科研究主題

生徒が主体的に学習し，美術の基礎的な能力を伸ばす題材の開発

～言語活動の充実を通して～

小俣　直喜

1　研究主題設定の理由

美術科の学習は，自分が表したいことを具現化していく表現活動と，自分なりの見方・感じ方で作品に触れ新しい価値を生み出す鑑賞活動からなる創造的な学習活動である。新しいものをつくりだす創造活動の喜びを味わうことを通して，生徒は美術の学習での学びを実感している。そのような主体的な学習の積み重ねが，生徒の美術の資質や能力を伸ばすうえで大切であることは，これまでも言われてきた。

美術の基礎的な能力は，４観点に示されているとおり，関心や意欲を基に発想・構想し，創造的な技能を働かせて表現する能力と，造形的な美しさや作者の心情・意図，表現の工夫を味わう鑑賞の能力である。基礎的・基本的な知識・技能と，思考力・判断力・表現力等を含むこれらの美術の基礎的な能力を身に付けさせるために，題材と指導の工夫が求められている。

学習指導要領における美術科の学習内容は，育てたい資質や能力から示されているので，題材については，各学校の裁量で独自に設定することができ，生徒の実態に沿って実践されている。本校美術科では，研究主題に「題材の開発」を挙げた。また，生徒が主体的に取り組める題材の開発と，指導方法の工夫と改善は切り離せないものであるので，副主題としては，指導方法の改善策としての言語活動の充実について研究することとした。魅力的な題材の開発と，指導の工夫改善を図り，生徒の学びにとって有効な授業をつくりたい。

2　研究の目的

生徒が主体的に学習するための魅力があり有効な題材を開発することを通して，豊かな感性の育成を目指す。また，本校全体研究の主題である自ら問う力を育て，思考力・判断力・表現力等の育成を目指すための言語活動を充実させ，美術の基礎的な能力を育む。

3　全体研究との関わり

本校の研究では，「自ら問う力」は，主体的に学習を進めていく上で重要な要素と捉え「自ら問う力」を育むことによって，思考力・判断力・表現力等を育成できるとした。それを受け，本校美術科における「自ら問う力」を育む表現と鑑賞の学習活動については，それぞれ次のように考えている。

表現の学習では，与えられた課題について，「何を主題にするか」「どのような材料や技法を用いるか」「どのような手順で制作するか」「テーマを表すための形や色彩，構成はこれでよいか」など，生徒が表したいことを具現化する中での様々な問題に当たりながら学習を進めていく。このように試行錯誤しながら描いたりつくったりすることが，「自ら問う力」を育むことになる。

鑑賞の学習では，まず，作品に出会ったときの「驚き」や「感動」が，問いを生み出すきっかけになる。そこから，「なぜそう感じたのだろう」といった，「問い」が生徒の心の内から生じる（本校全体総論）。この「問い」について主体的に取り組もうとする態度を育てることが，ここでは大切である。この「問い」を学級の生徒全員で共有し，自分の見方・感じ方で主体的に鑑賞し考えを発表したり，友達の意見に耳を傾けたりして，自分と違う視点や多様な価値観に気付くような学習活動により，生徒は作品の見方，味わい方などの鑑賞の能力を高めていく。

このような表現と鑑賞の学習活動の積み重ねが，「自ら問う力」の育成につながるであろうと考える。

Ａ）生徒に付けさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問い

本校美術科では，美術の授業の中で扱う「問い」は，必ずしも正解を求めるようなものではないと捉えている。また，授業者が設定する主発問でもない（本校全体総論から）。

生徒が表現や鑑賞の課題に向き合っているときには，それぞれの生徒の内に，常に「問い」が生じている。この「問い」に対する「答え」は，生徒それぞれ違うものであり，表現している作品や，感受した思いなども同じものではないはずである。正しい答がはっきりしているような「閉じた問い」に対して言われている「開かれた問い」をめぐって，創意工夫し試行錯誤しながら表現したり，他者と話し合うなどしながら鑑賞したりすることが，「自ら問うている姿」であり，美術の能力を育てるための重要な学習活動であろうと考えている。

美術の授業を通して生徒に付けさせたい力は，試行錯誤してよりよいものをつくりだそうとする主体的な態度や，偏見にとらわれず多様な文化を理解しようとする態度である。それらを育むための問いは，題材・課題が自分の問題として実感できたところから生まれるものである。

Ｂ）生徒に問いをもたせる教材のあり方

親しみや学習意欲がもてるような魅力的な題材は，生徒が自分自身の課題として取り組めるようなものがふさわしい。題材と生徒の実態とを結びつけられるような仕掛けを置くことも必要であろう。

本校の生徒は，与えられた課題を理解し，それに合った作品を簡単につくってしまう力はすでにもっている。そこから踏み出していけるような，好奇心を刺激し，一筋縄ではできそうもないと思わせ，発想やイメージの幅が広がる題材（問いがもてるような題材）を設定する必要がある。

Ｃ）生徒に問いをもたせるための教師の役割

教師の役割として，題材やねらいを提示したとき，発問したときなどの生徒の反応を拾い上げ，学習に結びつけること（教育的瞬間を見逃さないこと）の大切さが確認されている。また，生徒が主体的に取り組める題材を用意することともに，各授業の中でも，問いが生まれる場面を計画的に仕組むことも教師の役割であろう。

Ｄ）生徒の問いをどう見取るか

生徒の表現や鑑賞の活動に取り組む姿勢，描いている，つくっている作品の様子，発言，ワークシートなどから，問いを見取ることはこれまでどおりである。授業の中に言語活動など他者と交流する活動を計画的に取り入れ，その姿を観察することで，生徒の問いを見取ることもできる。それらの学習活動が，自分の考えを振り返り，さらに思考が進むような意味のある活動になっているか確認しながら，授業を進めていかなければならない。

４　研究の内容

①　美術科の研究の経緯

平成23年度は，鑑賞の授業提案を行った。一つの作品を巡って，生徒それぞれが感じたことを発言し，意見を交流するなど，言葉によるコミュニケーションという言語活動をしながら，作品に迫ることを試みた。それにより，考えの違いや，多様な価値に気付くなどの経験を通して，より深く作品を味わうことができた。そればかりでなく，自分の意見が大切にされたという満足感や達成感も，授業の重要な目的であることも分かった。

美術科における問うべき問いとは何か，問う力とは何かというとについて共同研究者，研究協力者と議論を重ねてきた。美術の授業での「問い」は，正答を求める「閉じた問い」ではなく，さまざまな答えが引き出される可能性のある「開いた問い」でなければならないことが改めて確認された。しかし，「問い」については，「その題材のねらいに迫るために問うのか」，「美術科として身に付けさせたい資質や能力の定着を図るために問うのか」，「課題を解決するための力を養うために問うのか」・・・，ということも考えていかなければならないことも分かり，継続して研究して行くこととなった。

平成24年度は，Ａ表現（２）に重点をおき，デザインの題材における問いについて考えてきた。デザインには，目的や条件が明確にある。また，他者の立場に立つ，他者に分かりやすく伝えるなどの機能をもっている。課題に臨んで，生徒はまず自由な発想で学習をスタートさせるのだが，構想を練る段階では，よりよいデザインを目指すことになる。すると，それは一つの「正解」をめざす作業のように思われる。しかし，生徒の作品を見ると，「山梨をイメージしたキャラクター」という制約と，「誰からも親しまれる」という条件をクリアしたさまざまなキャラクターができあがった。

25年度は，再び鑑賞の授業づくりに取り組んだ。作品に出会ったときの「驚き」や「感動」から生まれた「問い」を基に，探究的に学習することを通して，作品に対する新たな見方や感じ方で作品を捉え直せるようにしたいと考え，「冨嶽三十六景」の鑑賞を行った。作品に出会ったときに生じた「気づき」を基に，他者とのコミュニケーションを通してより深く鑑賞できるようにした。

②　題材の開発について

美術科は，他の教科と比べると生徒の実態に沿って題材や内容，年間学習計画などを設定しやすい教科である。本校の生徒に身に付けさせたい資質や能力，内容のバランスを見極めながら題材を設定したてきた。

現代は，高度情報化社会と言われているように，中学生も多くの情報にさらされている。テレビや雑誌，コンピュータゲームなどの刺激的な視覚情報があふれている。このような状況の中，美術教育においても，表現手段や鑑賞の対象も広がっている。マンガやＣＧを積極的に取り入れる実践も増えている。しかし，多様な視覚的な情報を感受す

るだけではなく，批判的に受け止める力や，自分の個性を生かした表現の追求など，判断力や思考力，表現力を働かせ，伸ばすような学習も大切である。このような力を培い，これからの生活にいかせる美術の学習を身に付けるためにふさわしい題材を考えていきたい。

③　言語活動の充実について

表現および鑑賞の学習において，発想や構想を練るときに言葉で考えを整理することや，作品などについて批評し合ったりすることなどの言語活動の充実を図ることは，有効な手だてであるとされている。

表現の学習は，課題について理解し，主題を発想することから始まるが，これから制作しようとする作品の主題や題名を言葉として記すようにすることで，「この課題について，この主題でよいのだろうか」と客観的に考えることができる。あるいは「この題名ですすめよう」という意欲につながる。形や色彩，使いたい材料，表現方法等と関連させながら発想し構想を練る学習では，自分の考えを整理したり，取捨選択したりするために，アイデアスケッチと併せて言葉で記す。試行錯誤しながら表現していく中で，当初の発想や主題，表現意図に照らして材料や用具の生かし方を決めたり（あるいは変更したり），他者と意見を交わしたりする際にも言語活動は有効である。

言語活動については，平成２３年度は，鑑賞の学習を中心に実践してきた。そこでは，作品など鑑賞の対象について，自分なりに感じ取った作品に込められたテーマや作者による制作の意図，全体から受けるイメージなどを言葉で書き表し，それを基に意見を発表し合ったり，話し合いや批評などで他者と意見を交流したりするなどの学習を行った。このような学習により，生徒は多様な価値に気付き，見方や感じ方を広げることができた。２４年度は，表現（２）（３）の実践の中での言語活動に重点を置いた。特に，発想や構想の力を発揮させる学習活動の場面で，グループで話し合う，発表し合うなどの活動を行い，生徒は，他者との交流の中でイメージを広げ，より良い表現への意識をもつことができた。その際，美術科におけるビジュアル・コミュニケーション能力の育成と，生活に役立つ美術を体感させるために，視覚的な言語活動も扱ってきた。

５　研究のまとめ

①　生徒に「問い」をもたせる授業の視点Ａ～Ｄに関して

Ａ）生徒に付けさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問い

鑑賞の学習において「問い」は，まず作品と出会ったときの感動から生まれなければならない。そこから，「なぜこの作品は心を打つのだろう」といった作品の本質に迫れるような授業を目指してきた。表現の学習では，「もっとよくならないだろうか」「誰もがよいと感じるだろうか」ということの追究となるような題材や授業づくり取り組んできた。このように，「感動」を基に課題を「追究」して行こうとする主体的に態度こそ，生徒に付けさせたい力である。

Ｂ）生徒に問いをもたせる教材のあり方，についてについて

美術科の学習内容は，身に付けさせたい資質や能力が基になっているため，目標を達成するための題材を授業者が自由に設定しやすい。そこで，生徒個々の発想があり，話し合うなどの活動を通して見方感じ方を深めたり，構想を練ったりする活動を仕組めるような題材を用意した。

岡本太郎の『森の掟』や，石井精一の『畳の記憶』を題材とした授業では，対話による鑑賞を行った。これらの作品から生徒が発した素直な感想を語り合い，作品の見方や感じ方を深めていくものだった。授業者からの発問は，「どこからそう感じたか」といったものとし，生徒の自ら気づきを中心に授業を進め，それが「問い」となり，「問い」を追究するようにした。この学習体験が，生涯にわたって美術を愛好する態度の基礎となるはずである。

「やまなしのマスコットキャラクターをつくろう」という題材では，キャラクターとしての条件を満たすデザインについて，グループ討議をしながら題材に迫った。キャラクターを生み出すという学習を通して，アイデアを実現させるためのプロセスや，他者とのコミュニケーション，他者を理解しようとする態度の大切さを学ぶことができた。

C）生徒に問いをもたせるための教師の役割，について

『洛中洛外図屏風（舟木本)』や『冨嶽三十六景』の鑑賞では，生徒それぞれか感じたことをグループで話し合い，さらにクラス全体で共有しながら，見方感じ方を深めることをねらって授業を行った。教師の役割は，より学習が深まるために，生徒のつぶやきや発言，ワークシートへの記述を拾い上げ，個々の問いをクラス全体で共有できる問いにすることであった。

D）生徒の問いをどう見取るか

授業の中で生まれる生徒の問いが，課題に迫るための問うべき問いなのかを仕組もう授業づくりを行ってきた。そして，発言やワークシート，話し合い，試行錯誤の様子，作品などから見取ろうとした。問いを見取るためには，授業のねらいや生徒に身につけさせたい力，４観点ごとの評価規準に照らす必要があり，その問いの価値を見極めながら，生徒の学びを評価したつもりである。

② 全体研究主題に関して（研究主題に迫れたか）

表現や鑑賞の課題を解決するための思考力･判断力･表現力等の育成という研究主題に迫るため，本校美術科では，「この作品のよさは何か」，「どのような工夫をすればもっと良くなるか」という，題材・授業づくりに取り組んできた。生徒が主体的に考えながら課題に取り組む学習の積み重ねにより，「自ら問う」姿勢を育成できたと思える。

美術科の目指す学力は，見栄えのよい作品をつくりあげる力だけではない。よりよいものを主体的に創造しようとする意欲や，豊かに発想，構想していく態度も重要である。本研究について成果を明確にするまでには至っていないが，確かな学力を身に付けさせるという観点から，本校全体研究に沿った３か年の取組は大変価値のあるものだった。

生徒が主体的に取り組める学習課題があり，成長や進歩を実感し，充実感を味わえる題材の開発と授業の工夫改善について，これからも継続して実践を重ねていきたい。

《参考文献》

文部科学省　「中学校学習指導要領解説　美術編」（平成20年９月）
文部科学省　「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」（平成23年５月）